

8

特集 ニキビ痕の予防と治療

ニキビ痕の漢方治療

許 郁江

ほう皮膚科クリニック 院長

痤瘡治療の unmet need である痤瘡癬痕は、患者の QOL を著しく低下させ、心に暗い影を落とす病変である。決定的な治療指針がないため、日常診療においても、治療者、患者ともに、十分な満足度が得られていないのが現状である。西洋医学で不十分なところを漢方で補うという観点から、今回、尋常性痤瘡の患者で、痤瘡癬痕があり治療を希望する者に対し、面皰改善薬を併用しながら、柴苓湯を投与し検討を行ったところ、陥凹に対する他覚所見と痤瘡癬痕の重症度、および痤瘡の重症度に有意な改善を認め、このことから、痤瘡癬痕に対し柴苓湯が有効である可能性が示唆された。本章では、初期のニキビ癬痕に対して、漢方治療による効果を臨床的に示しながら、その有用性を検討する。

はじめに

尋常性痤瘡は、ニキビ痕（痤瘡癬痕）を残してしまう可能性があり、それにより、QOL を著しく低下させてしまう特徴がある疾患である。そのため、可及的早期に炎症の勢いを沈静化させる治療が第一優先である。しかしながら、一度できてしまった痤瘡癬痕には、『尋常性痤瘡治療ガイドライン 2017』¹⁾ 上にもケナコルト[®]局注以外に治療指針の記載がなく、決定的な治療がないのが現状である。痤瘡癬痕で悩み、心に深い傷を負いながらも適切な治療を受けられないあるいは受けにくい患者が数多くおられるのが現状である。痤瘡癬痕は、見た目だけの問題ではなく、患者の QOL はとくに感情面で著しく低下しており、他の

炎症性皮膚疾患と比較しても、Skindex-16 平均スコアが高かったという結果が出ている²⁾。痤瘡癬痕を有する患者は、我々が想像する以上に、感情面で多大なストレスを抱えながら生きているという像が浮き彫りになってくる。

痤瘡癬痕

痤瘡癬痕は、尋常性痤瘡（紅色丘疹、膿疱）およびその他の皮疹が軽快した後に生じ、皮膚の色素沈着、隆起（肥厚性癬痕）、陥凹（陥凹性癬痕）からなる病変である¹⁾。最近の見解によると、痤瘡癬痕は、炎症性皮膚からだけでなく、微小面皰を含めた非炎症性皮膚からも出現すること

表 1 SCAR-S

重症度	スコア	臨床所見
なし	0	痤瘡癬痕なし
ほとんどなし	1	2.5m 離れると、ほとんど痤瘡癬痕は見えない
軽症	2	認識可能：患部の半分以下に痤瘡癬痕がみられる
中等症	3	患部の半分以上に痤瘡癬痕がみられる
重症	4	全体に痤瘡癬痕がみられる
最重症	5	全体に萎縮や肥厚性癬痕がみられる

統計学的解析は、Wilcoxon の符号付順位和検定を行い、 $p < 0.05$ を有意とした。

があり、炎症性皮疹は、必ずしも面皰の期間を経ておらず、微小面皰を含む面皰の段階で、すでに炎症が始まっており、癬痕化するリスクを有しているということがわかってきている³⁾。この観点からみれば、尋常性痤瘡は、治療に緊急性を要する疾患である。

炎症性痤瘡や非炎症性痤瘡（面皰）が一過性の病変であることが多いのに対して、痤瘡癬痕は永続的に残存するため審美的な問題をきたし、患者の QOL を低下させる一因となりうる。痤瘡癬痕には、ステロイド局所注射や外科的処置の他、充填剤注射、ケミカルピーリング、レーザー治療などさまざまな治療が試みられているが、治療の有効性は限られており、とくに陥凹（陥凹性癬痕）については難治である。柴苓湯は、内因性ステロイドホルモン誘導作用などの薬理作用を有し^{4,5)}、手術後や熱傷・外傷によるケロイド・肥厚性癬痕に対する有効性が報告されている漢方薬である^{6,7)}。今回、尋常性痤瘡の患者で、痤瘡癬痕があり治療を希望する者に対し柴苓湯を投与し、検討を行ったので報告する。

対象と方法

201X 年 3 月から 201X 年 12 月に当院を受診した尋常性痤瘡の患者で、痤瘡癬痕があり治療を希望した患者 10 例を対象とし、対象患者にクラシエ柴苓湯エキス細粒（KB-114, 8.1g/日・分2）を投与した。従来から使用中であった薬剤は変更せず、ケミカルピーリング、レーザー治療などの痤瘡癬痕に対する治療は、柴苓湯投与期間中は禁止した。

調査方法としては、投与前および 8～12 週後に、痤瘡

癬痕の他覚所見、痤瘡癬痕の重症度、痤瘡の重症度を観察およびスコア評価した（臨床写真は、さらに 1 年後までフォローし、1 年後の評価も提示した）。評価尺度として、痤瘡癬痕の他覚所見は、色素沈着、隆起、陥凹について 4 段階（0：目立たない、1：症状が少しある、2：症状あり、3：症状が強い）で評価、痤瘡癬痕の重症度は、Tan⁸⁾ が提唱している SCAR-S（表 1）で評価、痤瘡の重症度は『尋常性痤瘡治療ガイドライン 2017』（日本皮膚科学会）に準じてスコア化し評価した。

結果

患者背景を表 2 に示す。

痤瘡癬痕の他覚所見

他覚所見を図 1 に示す。痤瘡癬痕の他覚所見は、陥凹において、投与前 1.9 ± 0.9 、投与後 0.9 ± 0.9 であり有意 ($p < 0.01$) な改善を認め、4 例は「目立たない」となった。色素沈着および隆起の病変を呈した患者は少なく、有意な変化も認められなかった。痤瘡癬痕の重症度は、10 例中 9 例に 1 段階の改善が認められ、平均値は投与前 2.4 ± 1.2 から投与後 1.5 ± 1.1 と有意 ($p < 0.01$) な改善を認めた（図 2）。痤瘡の重症度は、治療前では、重症 5 例、中等症 2 例、軽症 3 例であったが、柴苓湯による治療後では全例が 1 段階の改善を示し、投与前後において有意差 ($p < 0.05$) を認めた。写真撮影に同意を得られた患者の所見を図に示す。症例 1, 2 とも痤瘡癬痕に対する治療歴はなく、